

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第7号

「ままごと」の新聞は、柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が不定期に発行する活動報告紙です。
発行元：ままごと
発行日：2013年8月10日
発行元：ままごと

「街と演劇」

「日本の大人」はじまります

柴 幸男 Yukio Shiba

今回、書きたいことが二つあります。まず、はえぎわ『ガラパゴスバコス』への出演。そして、『日本の大人』稽古のこと。

はえぎわのことは、この下でノゾエさんが詳しく語ってくれていると思いますので、短めに公演が終わって思つたのは、本当に出演させてもらってよかった、の一言です。ノゾエさんの演出は、とても静かでした。その声や表情が一番記憶に残っています。演出家には苦しい瞬間孤独な時間があります。だけど、ノゾエさんは冷静に、役者に、芝居に向き合い続けました。少なくとも、僕にはそう見えませんでした。僕にはそれがとても衝撃で、静かにノゾエさんのことを尊敬していたと思います。その敬意は、演技として、自分の持てる力を出し切ることで、表明したつもりです。演劇を営む人間として、とても幸福な時間を送らせてもらいました。あれから、演出家として、劇作家としての自分を、ずっと考えています。

その思案の中ではじまったのが、『日本の大人』の稽古です。この作品は、小学生と大人と一緒に楽しめるという挑戦になります。そして、もう一つ、この芝居には個人的な挑戦があります。それは、劇作家がつくる作品にしたいということ。最近の、自分の作品は演出家の作品だった、僕は思っています。

でも、今回は、そうはしなくなりました。まず、劇作家として、考えぬくこと、紙の上から生ま



看板上に書き落す名古屋の小学生



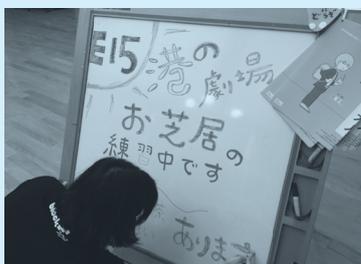
豊橋での小学校WSの風景です



小豆島では幼稚園で稽古しました



海の目の前に宿泊しました



公開稽古用に看板を手作り

れる作品にしたかったのです。というわけで、普段は戯曲がなければ、まずは稽古場や俳優たちに、実際に動いてもらったり、うなづいてももらったりするわけですが、今回はその時間を、一人でノートの前でうなる時間にしました。だけどノートの前で一人であらうなっている、アイデアはまったく生まれません。僕は、いつの間にか稽古場の思考、演出家としての思考に慣れちゃったようでした。だから、最初はなぜ自分が書けないのか、何が引っかかっているのかを、ただひたすらノートに書いていました。頭に流れる雑念をずっと書き留めているうちに、戯曲へのヒントが生まれます。その方法以外に、戯曲を生み出す方法はありませんでした。書き始めれば、必ず引っかかります。その引っかかりの原因を逃がすに、追い詰めていく。漠然とし

た不満が、具体性を帯びて、問題として表出する、そしてようやく解決の糸口が見えてくる。この孤独な作業こそが、劇作家の仕事でした。という文章を、僕は今、小豆島の合宿先の、今はもう使われなくなった幼稚園で書いています。2週間弱あった合宿稽古もおしまいです。僕は、ほぼ毎日、この幼稚園で生活しています。朝起きて作業をして、お昼に稽古して、ご飯とお風呂に宿に戻って、そして、幼稚園の職員室で作業をしました。周囲には何もなくて、夜は暗く、一人きりでした。考える、という行為は一人でしか出来ません。自分の中から何かを絞り出すしかなくて、僕は、久々にその作業に没頭できていることを今、ここで、うれしく思っています。

稽古の中で印象に残っているのは、愛知県で行った小学校でのワークショップと試演会です。なんとかつくった20分を小学生たちに実際に観てもらいました。この時の経験が、僕は、とても爽快で、久しぶりに自分が何のために演劇をやっているのか、思い出したような気分になりました。彼らの反応はとても早い。面白ければ笑います。つまらなければ飽きます。ただ、

その変化がとても早い。僕は、たどつつまらないう時間があってももうしばらくは何か面白いことが起こるかもしれないと待つことができず。でも、彼らにとつてのその時間はとにかく短く、僕から見ればほとんどない。今、面白いことが、劇的なことが、起こっているかどうか重要なんだ、と思いました。彼らの鮮やかな反応を、真横で体感しながら、僕はお客さんに反応される作品がつくりたいとあらためて思ったのでした。単純に言えば、笑ってほしいと思いましたが、驚かせたいと思いません。今まで、自分がつくりたいものをつくってきました。いや、自分がつくれるものをつくってきました。人の作品や、人の評価を気にしてつくってきました。だけど、いま、僕は、彼らにうけたいと素直に思っています。

最初の一步 ノゾエ征爾

from 東京

人は、観たこともない劇団からの主演オファーを引き受けるものでしょうか。

そもそも人は、役者でもない人に、主演オファーをするのでしょうか。あまり聞かない事柄ではありますが、実際それは現実としてありまして、前者は柴くんであり、後者は僕でありました。

はえぎわ本公演『ガラパゴスバコス』のことでした。柴くんは当然言いました。「僕役者もやってないのに、なぜ、僕なのでしょう?」

ノゾエは答えました。「アフタートークで話しているの観たことあって、それで、なんか、いいなと思ってる」柴くんは数日考えあぐね、出演を引き受けてくれました。「いいかもと思っ

そう、この不安にまみれた事象を押し進めたのは、それぞれの、「いいかも」というなんとも不確かな感覚のみだったと思います。

「いいかも」。自分のその感触を信頼するしかないし、作品づくりは、その積み重ねだと思っています。いいかもを一つ見つけては次のいいかもを探す。

最初からゴールを明確にして、そこに向かうのではなく、現場の者たちで時間をかけてその「いい」を探し、共有していき、最後に、お客さんとも共有できた時、そこでようやく初めて、やっぱこれ「いい」よね?と確認できるのです。

いくらでも速回りのできる長い道程ではありますが、そこへ至るまでの「いいかも」からの最初の一步。これを柴くんと共に踏み出したことが、やはりとても大きなことであつたし、この公演での喜びの一つでありました。が、柴くん自身はどうだったのか、打ち上げでは女性の話ばかりして終わってしまったので、まだ聞いていません。

のぞえ・せいじ

劇作家、演出家、俳優 はえぎわ幸男。99年「はえぎわ」を始動以降、全公演にて脚本、演出、出演。12年「〇〇トアル風景」にて第56回岸田國士戯曲賞受賞。

天野天街出版『わが星』、観てきました！

熊本に拠点を置く、夕辺東亜主宰の演劇ユニット「雨傘屋」の第4回公演として、ままごとの代表作『わが星』が上演されました（2013年5月31日～6月4日@Gallery ADO）。演出を手掛けたのは、名古屋を拠点に活動する少年王者館の天野天街氏。ここでは、雨傘屋主宰である夕辺東亜こと阿部祐子氏に上演のきっかけなどについてお聞きしました。

——雨傘屋を結成したきっかけを教えてください。

ふとしたきっかけで戯曲を書いてみたらわりとうまくでき、気をよくし、雨傘屋というユニットを立ち上げました。が、まもなく自分で作・演出をする気がなくなり、現在は熊本にWSで来られて以来のご縁の演出家・天野天街さんに滞在製作していただいています。

——これまでの活動は？

09年に『2090年、子どもの領分』作・演出・夕辺東亜で旗揚げし、11年に第2回公演『隣にいても一人』作・平田オリザ 演出・天野天街、12年に

第3回公演『フリータイム』（作：岡田利規 演出：天野天街）、13年に第4回公演『わが星』（作：柴幸男 演出：天野天街）を上演しました。

——今回、雨傘屋の上演作品として『わが星』を選んだ理由はなんですか？

柴幸男さんが『わが星』は天野さんの影響を受けて書かれたということをおっしゃっていると聞き、それではその影響元为天野さんは『わが星』をどう演出するのだろうか？という好奇心から選んではいただきました。

——実際に上演してみたいか？

——実際に上演してみたいか？



2013年6月、大石、宮永、端田と、『わが星』出演者の中島佳子さんと、熊本まで『わが星』を観に行きました。
 [1日目] 宮永・端田・中島の3名、大雨の熊本に上陸。お昼ご飯に馬刺しをいただきました。
 [2日目] 午前中に市内のマーケットにてベルギー帰りのチェルフィッチュの岡田利規さんと再会。大石も合流。① お昼過ぎ、劇場のある河原町に移動して路地裏散策、河原町、ステキな場所でした。② 終演後、宮永・中島は演出の天野さんと午前3時までお酒を飲み交わしました。天野さん、ありがとうございました。
 [3日目] 熊本城へ。④ 日本一の名城を堪能して、東京へ帰りました。熊本また行きたいっす！



雨傘屋『わが星』

「天野天街さんの劇空間そのものような河原町で、たくさんの音の粒に包まれながら、瞬く星たちを観ました。柴くんのテキストの中に新たなたくさんの星を発見した天街さんの天球儀に、すっかり魅せられました。世界を立ち上げていた俳優さんたちにも拍手。惜しむらくは主宰の阿部さんとお話できなかったこと。いつかお茶できたらなあ。」 端田新菜

ままごとの『わが星』のエッセンスはそのままで、まったく違った肌触りの作品が出来たと思いました。見せ方をいじくっても変容しない核のようなものを感じる作品でした。

——雨傘屋の今後の活動を教えてください。

特にありません。来年も公演できると思います。

column

第2回 「縁談のテーブル」

大石将弘「俳優」

大石が、いま話を聞きたい人に会いに行く企画。今回は前回に続き、劇団に所属している同世代の役者さん二人と、僕たちが抱える二つの問題について話しました。

「後編」

「30歳問題」

大石 何かの現場の間にオフアールとかがあつて行けなくて、それがもどかしさと思っちゃう。結局どつちかしか選べないんだ。

坂口 難しいのは、そういう時のために3カ月くらいあけて……。

大石 結局何もあいていない。

坂口 そこ耐えられないとだめだなんて思っている。

大石 辰平さん、CMのギャラ使い切らないと次のCMの仕事入らないと思つて、お金使いきつたつていう（笑）

坂口 回転寿司行つたり、無茶苦茶使つて後悔してる（笑）。

菊池 回転寿司はないね。

坂口 僕一個話したいのは、30歳問題。いつの間にか30歳になる。

大石 僕は今年30になりました。僕は20代に全然やれていない気がして。20代はがむしゃらに何でもやって、30代はその中から選んでいくみたいなイメージがあつただけ。

菊池 分かる。

坂口（菊池に）おれたちが出会ったのが24くらいじゃん。あの時の先輩たちが当時ちょうど30くらいで、え、そんな大人になつてねえぞつていう。

菊池 なんも変わってないよね。

大石 これからどういう仕事かしたいとかいうビジョンはありますか？

菊池 映画に出たい。あともちろんKERAさんの舞台に出たい。

大石 はるちゃん、菊池は去年今年と

<お相手> 菊池明明（ナイロン100℃）と 坂口辰平（ハイバイ）



「日本の大人」開幕！

みらいのおとな、とむかしのこども、がいつしよにみる演劇。



8月上旬にいよいよお目見えする、ままごとの新作『日本の大人』。あいちトリエンナーレ2013の委嘱作品として世界初演した後、4地域を巡回します。

本作は、柴にとって初の「親子向け」作品。これまでままごを顧てきたつていて、親子向け「作品」これまでままごらん、今回は一人でも多くのお子さんに観ていただきたいという想いから、柴は創作を前に、こんな言葉をつづっています。

これは、子供から大人まで、いつしよに乗しめる「えんげき」です。

ここで言う「子供から大人まで」とは、小学4年生くらいから死ぬ直前まで、です。

自分は、まわりより「子供」だと思つている人は、きつと何年生でもたいしょうなです。

自分、は、まわりより「大人」だと思つているような、本当の「子供」は、ちよつとえんげきしてください。

僕が、はじめて「えんげき」を観たのも、小学4年生のとき



稽古場より

NEXT

■柴幸男【演出】・大石将弘【出演】
 宮永琢生【製作統括】

ままごと「日本の大人」名古屋・豊橋・新潟・小豆島・伊丹ツアー

2013年8月10日【土】～15日【木】
 @愛知県芸術劇場小ホール
 8月17日【土】・18日【日】
 @穂の国とよはし芸術劇場 PLATアートスペース
 8月22日【木】・23日【金】
 @りゅうとびあ新潟市民芸術文化会館 スタジオB

8月25日【日】～27日【火】
 @小豆島 遊児老館（旧坂手幼稚園）
 8月30日【金】・31日【土】
 @伊丹 AI・HALL

■ままごと【作・演出・出演】

瀬戸内国際芸術祭2013（秋期）
 みなとあるき作品の上演と、旧幼稚園を演劇図書館にする企画を予定
 2013年10月5日【土】～11月4日【月・祝】
 @香川・小豆島 坂手港

編集後記

第7号は端田さんと宮永さんの通常のコラムはお休み、天野天街出版、雨傘屋『わが星』のレポートをお届けしました。劇団員にとって、非常に刺激的な体験だったようですね！ 次号、第8号もお楽しみに。（熊井）

企画・編集＝ままごと
 構成＝熊井玲
 デザイン＝西山昭彦